

大君試論

田村俊介

1 新必携の大君像

宇治大君の薫との恋愛を描く橋姫から総角までは、おそらく源氏物語全五十四帖中最も難解な巻々であろう。大君は何故死んだか。本稿は、もとよりこれにまattered一つの答えを提出するものではない。だが、わからない要素が多ければ多い分、わかるところまでは、原文に即して、精一杯の把握をしておく必要性も強いのではなからうか。

平成十年現在、作中人物それぞれに就いての学界の最も標準的な見解を示す文献の一つに、別冊国文学（学燈社）五〇号として平成九年五月十日に発行された『新・源氏物語必携』（本稿では新必携と略すことがある）の「源氏物語の人々」がある。「大君（おおいぎみ）・橋姫」の項を途中から抜粋したい。

このかたくななまでの結婚拒否（＝中君を薫に勧めてまで自らは結婚を拒否することか。田村注）は、生前の父宮のきびしい訓戒にもとづくが、さらに、匂宮の中の君に対する不誠実さに由来していた。中の君と結婚した匂宮は新婚早々から足が遠のき、彼女たちの期待を裏切った。その屈辱感が己が運命の無残さと結婚への不信感を引き出している。薫との好ましい関係を永続させようとすればかえって結婚を断念するしかないと思う。心痛からついに病臥。匂宮と六の君との縁談の噂をも、その病床で絶望的な思いで聞いた。苦しい息の下で、中の君の将来を薫に依頼しながら息絶えた（総）。物語では、彼女の結婚拒否の論理の確証が長大な心内語や対話によっているが、その言葉じたいは薫の現世否定的な言葉と奇妙に噛みあうところがある。

参考までに、昭和五十六年三月三十一日初版発行の『源氏物語必携』（本稿では必携と略することがある）の「源氏物語人物総覧」、^{【大君】}「大君」の項も該当する部分を引用したい。

このかたくななまでの結婚拒否の論理は、生前の父宮のきびしい訓戒にもとづくが、さらに、勾宮の中の君に対する不誠実さが由来していた。すなわち中の君と結婚した勾宮は新婚早々から足が遠のき、彼女たちの期待を裏切った。その屈辱感が己の運命の無残さと結婚への不信感を引き出している。薫との好ましい関係を永続させようとすればかえって結婚を断念するしかないと思う。心痛からついに病臥。勾宮と六の君との縁談の噂をもその病床で絶望的な思いで聞いた。苦しい息の下で中の君の将来を薫に依頼しながら息絶えた（総）。右のように大君の結婚拒否の論理は、遺戒ゆえの観念がしだいに中の君の結婚を具体例としながら確証されていく。物語ではそれが長大な心内語や対話によっているが、その言葉じたいは薫の現世否定的な言葉と奇妙に噛みあうところがある。（橋）総

異同があるのは傍線部で『必携』の「の論理」「すなわち」は削除、「不誠実さが由来」は「不誠実さに由来」、「己の運命（おのれのうんめい）」が「己が運命（おのがうんめい）」（カッコ内のよみは田村）に改められている。『必携』の最後から二番目の一文も削除されているが、「勾宮の不誠実」、中君の新婚生活を目の当たりにしたことが大君の心痛の最大の原因の一つだと扱っている点は『新必携』に引き継がれている。あらずじをなぞるときにはそのような解釈も十分成り立つが、原文に即し、接尾語や副詞にまで着目して再検討してみたい。

2 総角巻の大君

「総角」（十）段落で、薫はかねてからの要望に応じて、勾宮を中君のもとへ手引きする。勾宮が山里の娘だからと言って軽んずるのではなく、むしろ山里の娘であるからこそ、めったに手に入らない貴重な花として並々ならぬ関心を寄せていたことは「椎本」（二）によってもわかる。

おもしろき花の枝を折らせたまひて、御供にさぶらふ上童のをかしきして奉りたまふ。

匂宮「山桜にはふあたりにたづねてきておなじかざしを折りてけるかな

野をむつまじみ」とやありけむ。」

歌語「山桜」は、「若菜上」巻の最後の段落、「若紫」(一二)段落の光源氏の詠歌「面影は身をも離れず山桜心のかぎりとめて来しかど」、そして同(九)段落の贈答歌に拠れば、普通の「桜」より価値が高いのはもちろん、「優曇華の花」とも比較の対象に選ばれる程であった。期待は裏切られず、匂宮はとまどうばかりの中君を初めて見たときから今まで経験が無い位強く魅きつけられ、「夜をや隔てん(一一)一夜でも通わない日があつてよいものか」と思い悩むが、これ程の愛情は、前編では、紫上と新枕を結んだ光源氏に匹敵する。光源氏も「夜をや隔てむ」と思しわづらはれるれば、いともうくて、なやましげにのみもてなしたまひて、源氏「世の中のいとうくおほゆるほど過ぐしてなむ、人にも見えたてまつるべき」とのみ答へたまひつつ過ぐしたまふ。」(「葵」(二九))のであるが、匂宮も宇治までの遠距離をいわず毎晩通うことを本気で画策し、「たはやすく通ひ給はざらむ山道の遥けさも胸いたきまで」思つたのは、中君が前日よりもよやかな物腰で応対した二日目であつた(「総角」(一二))。こうして、普通以上に幸福な新婚生活が営まれて行くが、十月一日、紅葉狩を口実に宇治訪問を実現した匂宮が、母・中宮の厳しい監視にあつて八宮邸をよそに帰京する。八宮邸ではそれをどう受けとめたか、(二四)段落に描かれている。

〔二四〕段落 地の文 299⑦～⑩

正身は、たまさかに対面したまふ時、限りなく深きことを頼み契りたまへれば、さりとともこよなうは思し変らじと、おほづかなきもわりなき障りこそはものしたまふらめと、心の中に思ひ慰めたまふ方あり。

〔二四〕段落 大君の心内文 301⑦～⑧

この世にはいささか思ひ慰む方なくて過ぎぬべき身どもなめり、と心細く思す。

両文は新全集に拠れば、たった三十行しか隔てていないが、明らかに齟齬している。そもそも「源氏」や「紫式部日記」には

思ひ慰むる方あり(「思ひ慰む」は下二段。敬語は省いた。)

思ひ慰む方なし(「思ひ慰む」は四段。)

という措辞が他にほとんどの^③ので、こうした場合必ず両者を双関して深く味読しなければならないと常々考えているが、作者は大君の認識が誤りであることを読者に知らせようとしているのではなからうか。心内文では「いささか」という断定的な副詞、「ども」という複数の接尾辞が使われているにもかかわらず、中君は、案外、幸福な気持でいる。新全集の頭注に「中の君は、外から見ている大君とは異なつて、直接勾宮の心情を聞かされ、新妻らしい愛情も感じていて（「一七」）、夫のことを善意に解したい気持がある。」「夫婦の契りを交した者だけがいづく相手に対する連帯感である。中の君には、結婚を後悔したり、勾宮の不実をなじる気持はとほしい。」と説かれている通りである。

ところが勾宮は両親の懇願を否び切れず、夕霧右大臣の六の君と婚約の運びとなる。薫の供人からこちらの女房へと伝えられたその噂を耳にした姉妹の反応が「二九」段落に描かれている。

〔二九〕段落 大君の心内文 311 ③ ④

かくいみじくもの思ふ身どもを（天国ノ八宮ハ）うち棄てたまひて、夢にだに見えたまはぬよ、

〔二九〕段落 地の文 311 ④ ⑤

昼寝の君、風のいと荒きにおどろかされて起き上がりたまへり。山吹、薄色などはなやかなる色あひに、御顔はことさらに染めにははしたらむやうに、いとをかしくはなばなとして、いささかもの思ふべきさましたまへらず。

大君は今度も接尾語「ども」を使って自分と妹が同じ精神状態にあると考え、「いみじくもの思ふ」と認識しているが、たった十二行あつと、「いささか」という、今度は語り手の断定的な副詞とともに、その認識が否定されている。

地の文には、よほど否定的条件が揃っていない限り、作中人物の客観的状态が叙述されていると見なければならぬ。客観的に見れば、中君はそれなりの幸福を得ていた。幸福な中君を不幸と思わせたのは、或いは、いくらか不幸だけである中君を自分と同じくらい不幸だと思わせたのは大君の主観であり、所謂「結婚拒否」の論理である。「結婚拒否」の論理は、藤村潔氏の^④ように一夫多妻制下の女性一般の不幸に由来すると考えるべきか、榎本正純氏の^⑤ように愛の移ろい易さに対する抗議と取るべきか、更には、吉岡曠氏の^⑥ように、ここに至るまでの薫の近づきにくい性格に拠るとすべきかは読者一人一人の判断に委ねられていると言つてよいが、少なくとも、妹の新婚生活を客観

的に把握した結果でないことだけは確かである。

3 最近の大君論

最近の大君論は、薫と中君の組合せを重視する傾向が目立つ。

○西耕生氏「『ものの音めづる』心」『中古文学』47号所収（平成三年五月）

○中川照将氏「八宮の『本心』と薫の『誤解』——薫に見る『昔物語』からの逸脱・序章——」『詞林』二十二号所収（平成九年十月）⁷
○今井久代氏「父の姉娘の物語」『国文学解釈と鑑賞別冊 人物造型からみた『源氏物語』』所収（平成十年五月）

まず西氏は、楽器の演奏の場面（「橋姫」（一〇））を手懸りに、父八の宮は薫の相手としてまず第一に中君を考えていた、と指摘する。父は箏の琴の名手である中君を薫に、と前から配慮していたが、薫が垣間見したとき、たまたま大君が箏の琴を手にしていたため、以後大君に執着することになった、という論旨で、氏の獨創性、発想の鋭さは高く評価されよう。⁸そして、60頁上段6行目の「父の姿勢をうけつぎ中の君を押し立てようとする大君」という読みを継承したのが今井論文であった。

○なぜ大君は、薫を妹に譲り、妹と薫の結婚を執り行おうとしたのか。確かに女の自由結婚という不名誉は免れ、また父八の宮の真意に叶う行動とはいえ、わずか二歳という年齢差は、妹中の君の後見となるには小さすぎる。二歳しか違わぬ姉が、中の君の後見になることを使命と考えたのはなぜであろうか。自己犠牲的ともいえる、この奇妙な大君の考え方を理解するには、大君の生い立ちに戻るほかならう。大君を育て上げた人間関係が、結婚を拒否し、妹の後見となろうとする、不思議な大君の行動を導いたはずである。

（156頁下段8行目～157頁上段6行目）

○身分ある姫君が、親または「さるべき人」の裁可に従うことなく、姫君自身の判断で自由結婚することは、大変な不名誉と考えられていた時代である。そして八の宮は、生前に娘の結婚を決めることができなかったが、父の真意は、娘の一人と薫を結婚させることにあった。この父の真意を汲み、なおかつ貴族の姫君としての名誉を譲る最善の方法は、大君が後見となって中の君と薫を結婚させることで

あり、それは八の宮の生前からの八の宮家の人間関係を、ごく自然に敷衍した行動なのである。八の宮の生前も、死後も、大君は中の君を庇う八の宮家の女主人として薫とことばを交わしていたのであり、男君に対する女君は、あくまで中の君なのであった。

(163頁上段3行目～14行目)

右の諸論はこれだけで十分説得力を持つが、更に今井氏の御前稿「宇治八の宮の遺戒と俗性」⁽⁹⁾に支えられて居り、主旨の根幹を否定することは誰もできないだろう。特に、八の宮の零落・死や遺戒のみを結婚拒否の原因と見た従来の一部の仮説と比較すると遥かにすぐれている。従来の仮説では、何故、大君の場合に限って、一流貴顕との正式の結婚が絶望的だったのか説明がつかないからである。

ただ一つ疑問に思うのは、一般に姉というものは妹が産まれたときから姉であるはずなのに、大君は何故二十六歳の秋になつてはじめて「姉になった」のかという点である。心内文と地の文を前から順に進めて行く限り、「姉心」⁽¹⁰⁾が頭に浮かぶのは、「総角」(五)がはじめてである。

中の宮を、人並に見えなしたらむこそうれしからめ、人の上になしては、心のいたらむ限り思ひ後見てむ、みづからの上のもてなしは、また誰かは見あつかはむ、

(240頁)

続く「六」段落の心内文

せめて恨み深くは、この君をおし出でむ

(244頁)

にも、自己犠牲の心などかけらも感じられない。むしろ中君を犠牲にして自分を守ろうとする心である⁽¹⁰⁾。これを実行に移すのが「七」段落の風の荒い晩だが、薫の浸入に中君を一人残して部屋の際に隠れる大君を、女房の弁は「いとあまり深く、人憎かりけること」(255頁15行目)と呆れ、薫は「身投げしたい」と嘆き(256頁3行目)、語り手は「壁の中のきりぎりす」(255頁10行目)と辛辣な避難を込める。

文脈、用法にも拠るが、一般に、人間を虫やその他の生き物に比えるのは、『万葉集』348番の

この世にし 楽しくあらば 来む世には 虫にも鳥にも 我はなりなむ

(全集。傍線は引用者)

清寧記「三」段落の

潮瀬の 波折を見れば 遊び来る 鮎(まぐろ)が 鰭手に

妻立てり見ゆ

とうたひたまひき。爾に志昆臣愈いふよ 怒りて

(全集『古事記 上代歌謡』。傍線は引用者)

『狭衣物語』の

「ある人く〳〵の程にてだに、いとかく淡々あはなしう、飛び交ふ鳥蟲とらむしなどのやうに、行ずりの宿世すくせ、あるやうはある」

のように、最も厳しい屈辱なのである。

(大系本147頁。傍線は引用者)

4 「総角」「三」段落をめぐつての薫論

このように「虫」に比べられるような振舞いまでして大君が薫を拒み続けた理由は、吉岡曠氏の言われるように、女が応対に困るような薫の雰囲気であろう。吉岡氏は、本稿でも引用した、「総角」「五」段落の大君の心内文を第一段(「ゝまた誰たれかは見あつかはむ」まで)と第二段に分けて、次のように述べている。

「みづからはなはかくて過ぐしてむ」「わが世はかくて過ぐしはててむ」という言葉が、それぞれ別の理由をともなつて二度くり返されていることが、とつおいつ考えている大君の思念の深さを浮彫りにしているが、第一段と第二段とは、自分には後見者がいない、しかし薫が普通の男性であるならば、という文脈でつながるのであるから、第一段の理由と第二段の理由とは、当然第二段の理由の方が重いと見てよいであろう。つまり、中君の将来に対する顧慮とか、後見者がいないこととか、さまざまな障害はあつても、薫が世間並みの男性でありさえすれば、自分は結婚にふみ切つたであろうと大君は考えていたのであり、それにもかかわらず大君が独身で通す決心をしたのは、菊池さんがいうように、薫の「はづかしげに見えにくきけしき」が、大君にとって「いみじくつつまし」かつたことがそのもつとも大きな理由であつたことを、右の述懐は物語っている。

更に、氏は、

(『源氏物語論』442-443頁)

大君にこういう動かしがたい印象（Ⅱ「はづかしげに見えにくきけしき」）をうえつけ、「わが世はかくて過ぐしはててむ」と決心させたについては、文脈からいっても、その前夜の事件が直接のきっかけとして大きく作用しているはずである。

（同書445頁。カッコ内は引用者）

と続け、「（三）段落で、薫が大君の「御けはひ、思ふやうに、かをりをかしげなり」と感じながら「言ふかひなくうしと思ひて泣きたまふ御気色のいとほしければ、」「せめてのどかに思ひなし」てそれ以上の行為に及ぼす夜を明かしたことを批判する。だが、これに関しでは、大朝雄二氏の反論がある。

女人の部屋に押し入り、大君を抱き寄せて「みぐしのこほれかりたるをかきやりつつ見給」（六の24ページ）ような状態にまで及びながら、遂に何事もなく一夜が明けたことで大君が致命的に傷ついたという解釈は、大君の心事に立ち入って言うならば成り立つだろう。その時に大君が男と結ばれることを覚悟したと読むのは必ずしも深読みにすぎるとは思わない。だが、それは薫が大君の気持ちを受けとりそこねたためだと解され、それが薫のやさしさであるとされる点に、私は賛成できない。言葉尻を捕えるようで恐縮なのだが、その時の「大君の気持」とは何なのだろう。結ばれることを覚悟したことと、結ばれたいと願ったこととの間には、やはり決定的な相違があるといわなければなるまい。もし吉岡氏がこの時の大君の気持について、結ばれることを覚悟した次の瞬間に、結ばれたいと欲したというが如き心理の展開を読まれるとしたならば、それはあまりに近代主義的解釈にすぎよう。そしてまた、心ならずも結ばれることを覚悟した大君の心情が哀れで、薫はそれ以上の行為に出ることが叶わなかったと読むならば、それは決して薫が大君の気持を受けとりそこねたことにはならないのである。

（『源氏物語続篇の研究』。164～165頁）

そこで、今、あらためて「（三）段落を読んでみたい。

「薫ハ」屏風をやを押し開けて入りたまひぬ。「大君ハ」いとむくつけくて、なからばかり入りたまへるに「薫ニ」ひきとどめられて、いみじくねたく心憂ければ、大君「隔てなきとはかかるをや言ふらむ。めづらかなるわざかな」とあはめたまへる……（234頁）

前に、女房の弁を介して、「はらから」のような気持で心の「隔てなく」交際したいと申し入れていた（230～231頁）薫が豹変したので、大君が必死でたしなめているが、このような女性の心理は『伊勢物語』第四十九段に通ずるものである。

むかし、男、妹の、いとをかしげなりけるを見をりて、

うら若みねよげに見ゆる若草を

人の結ばむことをしぞ思ふ

ときこえけり。返し、

はつ草のなごめづらしき言の葉ぞ

うらなくものを思ひけるかな（集成。傍線は引用者）

兄として「うらなく」信頼していた男の突然の懸想に狼狽した妹の言葉「めづらしき」を踏まえて、紫式部は、大君にも「めづらかなる」と言わせているのだらう。だとすれば、『後撰集』や『伊勢物語』の他の小段によくあるような贈答、男の贈歌の求愛をかわしなお一層の情熱をかきたてるためにわざとじらしてみせる女の答歌とはかなり違った響きを持つ。

もし仮に、大君の態度やその置かれた状況を重んずる余りこのような一語一語を軽んじ、「心の実際から離れて言葉じたいが自立している」と断定してしまうならば、宇治十帖に関するあらゆる国語学的研究とある種の文学的研究のみならず、青表紙本河内本というこまかな議論（両系統の異同は他の文学作品に比べて小さい。特に宇治十帖ではそうである。こまかな異同が点在するのみ。）がむなしくなるのではなからうか。その行き着く果てが「哲學じみた花やかな談説の亂舞」であるのは火を見るより明らかである。訓話を忘れた哲學じみた談説は決定的な反論も受けにくいからいつ迄も繰り返されてしまうのだらう。

無論、右の卑見には確証が無い。一般に本歌取りというものは、可能性の指摘は容易でも、特定の一首を本歌と断定するのは極めて困難である。しかし他の巻ならぬ「総角」の「二六」段落では「読者がそれとわかることを前提とした書き方」で第四十九段が物語取りされている事実を附言しておきたい。加えて、玉鬘も、父と見ていた光源氏から懸想をされたとき、

かくめづらかなること

（三巻213頁）

という言葉を使っている。最後にもう一例、近親ではないが男が突然忍び込んで来るときまだ心の準備のできていない女性の狼狽を言い表すのに、大君自身が「めづらか」という言葉を使っている。

あらましごとにてだに（＝薫トノ縁談ヲホノメカシタダケデモ）つらしと思ひたまへりつるを、まいて、いかにめづらかに思し疎まむと（妹ニ対シテ）いと心苦しき

（五卷252頁）

これらのような、同じ作品や、当時の読者が共通認識として持っていた先行文献の用例から帰納的に語義を推定していく研究方法のほうが、恋愛に於ける「一般論」の如きものよりも、優先されて然るべきである。¹³⁾

5ノ1 椎本巻の薫その一

「つきあいにくい」という薫親が夫君の心の奥底で動かしがたく定着した巻は、私は、一つ前の「椎本」であると思う。

総角巻の心内文を見て行くと、遙かに身分が上である薫に対して、無敬語表現が目立つ。¹⁴⁾この現象一つ取ってみても、夫君の気持ちは、もはや、完全に薫から離れてしまっていることは明らかであろう。例えば若紫巻の光源氏の心内文を見て行くと、はじめのうちは無かった紫上への敬語が次第に加えられている。以後、死ぬまで、いや、彼女の死を悼む幻巻に至るまで、敬語が省かれることは無かった。心内文の敬語と無敬語は、欧米の言語や現代日本語の慣習を当てはめて読み取るべきではなく、少なくとも『源氏物語』に限っては心の奥底の好悪と関わりがあるのである。

従って、本節では椎本巻に着目したい。最近、源氏物語作中人物論の企画が目白押しに実現し、その中には当然「夫君論」や「薫論」も収められているのだが、これらの論文でも以前の論文でも、管見に拠る限り、椎本巻は総角巻以上に重視されてはいないからでもある。

「椎本」（一〇）段落は、八宮の四十九日が過ぎたばかりで、のこされた姉妹の悲しみも癒えぬ頃の薫の訪問が描かれている。

御心地にも、さこそいへ、やうやう心静まりて、よろづ思ひ知られたまへば、昔ざまにても、かうまで遙けき野辺をわけ入りたまへる心ざしなども思ひ知れたまふべし、すこしぬざり寄れたまへり。思すらんさま、またのたまひ契りしことなど、いとこまやかになつかしう言ひて、うたて男々しきけはひなどは見えたまはぬ人なれば、け疎くすずろはしくなどはあらねど、知らぬ人にかく声を聞かせたてまつり、すずろに頼み顔なることなどもありつる日ごろを思ひつづくるもさすがに苦しうて、つつましかれど、ほのかに一言など

答へきこえたまふさまの、げによろづに思ひほれたまへるけはひなれば、いとあはれと聞きたてまつりたまふ。黒き几帳の透影のいと心苦しげなるに、ましておはすらんさま、ほの見し明けぐれなど思ひ出でられて、

色かはる浅茅を見ても墨染にやつる袖を思ひこそやれ

と、独り言のやうにのたまへば、

色かはる袖をばつゆのやどりにてわが身ぞさらにおきどころなき

はつる糸は」と末は言ひ消ちて、いといみじく忍びがたきはひにて入りたまひぬなり。

ひきとどめなどすべきほどにもあらねば、飽かずあはれにおほゆ。

(197-199頁)

いくら父の思い出のためとは言え、はるばる訪ねてきてくれた厚意に感謝し、大君は膝行して少し近くに寄る。持ち前の親しみ易さに好感を覚えるが、初対面の異性に声を聞かせることへのためらい、何となく経済的にも頼みにしていた自己への嫌悪なども加わって複雑だったが、恥らいを抑えついに意を決して「ほのかに一言など答へきこえたまふ」のであった。

このほのかな一声が大君自身の恋情と無関係な発言——例えば父の思い出や妹の紹介——だとすれば、その前の行きつ戻りつの煩悶は無用だったはずだ。まさしく、他の誰でもない自分自身を薫に賭けようとする真摯な一声であった。

だが、薫の反応は、恋というよりも、同情に満ちたものとなつてしまった。「思ひこそやれ」で結ばれる贈歌には、「親に先立たれ生活の手段を失ったあなたたち姉妹に同情してあげましょう」という響きがある。悪く取れば、相手のアキレス腱に触れることによつて意のままにしようとする狙いの和歌である。新全集上段の鑑賞欄には「こうして互いの気持がしだいに近寄つてもいく」（全集では「しだいに寄つてゆく」）と書かれているけれども、むしろ大君が薫に背を向けていく基点となつたのがこの段落だと言えよう。

吉岡曠氏は宇治十帖とドストエフスキーの長編『白痴』とを比較されて、天上的な性格の薫と地上的な性格の匂宮をそれぞれムイシュキン公爵とロゴジンに比定して居られるが、確かに、「恋」で愛するのではなく「あわれみ」で愛する公爵の性格が悲劇の遠因になっているのかもしれない。孤児となり数奇な半生をたどってきたナスターシャは、公爵の自分への気持のなかに「あわれみ」を感じ取ったからこそ、最後には殺し合いとなる危険を承知しつつ、もう一人の対照的な男主人公ロゴジンのもとへ走ったのではなからうか。¹⁸

5ノ2 椎本巻の薫その二

同様の失言は、翌年の正月にも繰り返されてしまった。

「(一三)段落で大君は薫との対面を「つつましく」(206頁7行目)思ったが、多忙のなか、雪深い山道をはるばる通ってきた厚意を無にするわけにはいかなかった。ところが、仕方なく応対した割には話がはずんだのであろう、大君は昨年より「すこし言の葉^はつつけてものな^ど」おっしゃり(9ノ10行目)、その様子は薫の情熱をなお一層かきたてた。

そのあとの薫の長い会話は句宮のことだった。

薫「宮のいとあやしく恨みにたまふことのはべるかな。……。「句宮ハ」さらに、軽々しく、始め終はり違ふやうなることなど、見せたまふまじき気色^{けしき}になむ。人(「世間の人々」)の見たてまつり知らぬことを、いとよう見きこえたるを、もし似つかはしく、さもやと思しよらば、そのもてなしなどは、心の限り尽くして仕うまつりなむかし。御中道^{なかみち}のほど、乱り脚^{あし}こそ痛からめ」と、いとまめやかに言ひつづけたまへば、わが御みづからのこととは思しもかけず、人の親めきて答へんかしと思しめぐらしたまへど、なほ言ふべき言の葉^はもなき心地して、大君「いかにとかは。かけかけしげにのたまひつづくるに、なかなか聞こえんこともおぼえはべらで」とうち笑ひたまへるも、おいらかなるものからけはひをかしう聞こゆ。

(206頁13行目ノ208頁14行目)

句宮と中君のことを持ち出して大君に迫ろうとする薫がまわりくどいと説く向きもある。まわりくどいのは事実だが、私はそれ程嫌味であつたとは思えない。大君も「おいらか」に「うち笑」うだけである。

本当に嫌味なのは次の場面である。

薫「かならず御みづから聞こしめし負ふべきことと思ひたまへず。それは、雪を踏みわけて参り来たる心ざしばかりを御覧じわかむ御このかみ心にても過ぐさせたまひてよかし。かの(「句宮の」)御心寄せは、またことにぞはべべかめる。ほのかにのたまふさまもはべめりしを、いさや、それも人(「他人である私」)の分ききこえがたきことなり。御返りなどは、いづ方にかは聞こえたまふ。」と問ひ申したまふに、ようぞ戯れ^{たはぶ}にも聞こえざりける、何となけれど、かうのたまふにも、いかに恥づかしう胸つぶれまし、と思ふに、え答へ

やりたまはず。

大君 雪ふかき山のかけ橋君ならでまたふみかよあとを見ぬかな

と書きて、さし出でたまへれば、薫「御ものあらがひこそ、なかなか心おかれはべりぬべけれ」とて、

薫「つららとち駒ふみしだく山川をしるべしがてらまづやわたらむ

さらばしも、影さへ見ゆるしるしも、浅うははべらじ」と聞こえたまへば、思はずに、ものしうなりて、ことに答へたまはず。けざやかにいとも遠くすぐみたるさまには見えたまはねど、今様の若人たちのやうに、艶げにもてなさで、いとめやすくのどやかなる心ばへならむとぞ、推しはかられたまふ人の御けはひなる。かうこそはあらまほしけれと思ふに違はぬ心地したまふ。

(208頁15行目―210頁6行目)

前述の如く、大君は妹の後見役に徹しようとしていたと仮説する今井氏も、この贈歌にだけは「女としての薫への慕情」が秘められていることを認めている。

しかし、そのすぐあとの反応が「御ものあらがひこそ、なかなか心おかれはべりぬべけれ」であったのは、しかも心に思うだけではなく口に出して言った（「はべり」という丁寧語が使われている）のは、どれほど大君を傷つけ、困惑させたことだろうか。大君は自分の方から「御ものあらがひ」をしたのではない。「御返りなどは、いづ方にかは聞こえたまふ」という質問に答えて「君ならでまたふみ通ふあとを見ぬかな」と詠んだのだから、極く自然であり、作法にかなっていると言っていると留まらず、「君ならで」は、和歌の伝統に照らして、歌人としても人間としても、女性の愛の告白の最高の表現だったと言えまいか。『伊勢物語』では、筒井筒の段の「くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき」（集成。第二十三段。傍線は引用者）が想起されるが、これ程の名歌の返事としては、今度こそ、匂宮のことを持ち出して「（中君のもとへ導く）しるべ」という言葉を使ったのが不快感を与えたに違いない。更に私見に拠れば、「つららとち駒ふみしだく山川」は贈歌の「雪深き山のかけ橋」を踏まえたつもりなのだろうが、いくら同じ内容であっても、詠み手がその土地の住人なら謙譲の美德、詠み手が都人である場合は無礼千万である。そうしたあれこれがつもりつもって、さすがに大君も「思はずに、ものしうなりて、ことに答へたまはず」と不快感を露わにしている。贈答歌の直前の心内文「……かうのたまふにも、……」

までには薫への敬語表現が散見するのに総角巻の心内文にはほとんど見られないという現象も、やはり、この段落を機に大君の気持が薫から離れたためであった。

以上「一〇」「一三」という二つの段落に見た薫の失敗は、出生の疑問に端を発する劣等感、消極性や恥じらい——特に、光源氏の血を引く勾宮への強い劣等感——に由来する⁽¹⁹⁾のであり、我々読者には、和歌の前後の心内文や地の文に拠って、薫の真情が痛い程わかる。だがいっぽう、会話文や和歌だけで判断するしかない大君が、薫の消極性に愛の薄さを感じ取ったのも仕方の無い話である。打ち解けて寄って行ったらその時に限って必ず裏切られる、「我も人も見おとさず、心違はでや」むためには一定の距離を保たなくてはいけない、という結婚観が抜き差しがたく形成された（総角巻。288頁）のは決して総角巻ではなく、椎本巻後半なのであった。

6 『狭き門』のアリサとジェローム

ところで、島津久基氏は『紫式部の藝術を憶ふ』（昭和二十四年）⁽²⁰⁾「われくはもつと驚いてよいのではないか——紫式部の神才を憶ふ——」の中で、橋姫物語とAndré Gideアンドレ・ジッド『La porte étroite狭き門』とを比較して、

をかしなほどの偶合である。私は岩波文庫で「狭き門」を読んだ時、おやと思つた。これは何處かで一度讀んだことがあると、錯覚が起きて仕方がなかった。そこで改めて椎本巻や總角巻を取出して雙方を比べながら、要所々々を書抜いて極く簡単な覚え書きを作成してみた。やつぱり似てゐる。

と驚いている（67～68頁）。以後、『必携』『研究史と研究書解題』『比較文学的研究』（194頁。執筆は池田和臣氏）でも、平成六年3月『国文学解釈と鑑賞』『源氏物語』の主題——源氏物語構想論の国際化——（高橋和夫氏）でも取り上げられているし、源氏物語研究史上かなりの歴史と普遍性があると言わざるを得ない。西洋の小説を参照することは是非は立場に拠るうが、客観的に言えるのは『狭き門』ほど類似する西洋文学作品は無いということ、従って、もし『狭き門』を源語研究から排除するなら他のあらゆる西洋文学、あらゆる近代小説も排除しなければならないということである。実際、西洋の文学観を導入することを激しく批判し、「反近代」を声高に主張する玉上

琢彌氏でさえ、橋姫物語四帖のあらすじを紹介したあと、

ここまではジイドの『狭き門』によく似ている。

(角川鑑賞日本古典文学第九卷358頁)

と書いているくらいなのである。

だがいっぽう、『狭き門』が、というより、島津氏の『狭き門』理解が、橋姫物語誤解の種を蒔いたという側面も否定できない。野村精一氏は「源氏物語の問題——宇治十帖の人間像(一)——」⁽²⁾のなかで、島津氏のジッド理解には問題があるとし、「故島津久基博士」が求婚拒否の原動力を「大君の信仰心」と見たのは「A・ジッド『狭き門』との相似を強調されるための速断であつた」と述べている。

いったい、『狭き門』のAlissaアリサは「信仰心」のためにJeromeジェロームの求婚を拒否したのだろうか。ストーリーを追うだけなら、或いは、終盤のAlissaの言葉や日記の文章を額面通りに受け取るなら、そのような解釈も成り立つかもしれない。しかし『La porte étroite』は改稿に継ぐ改稿、彫琢に継ぐ彫琢の末、コンマ一つ動かすだけでもその諧調が損なわれるほど精巧に仕上がった作品であるので、読者の側にもそれ相応の慎重さが要求される。本節では、恐らく日本側で生じたと思われる誤まりを三点略述して参考に供したい。引用は、folio文庫『La porte étroite』に拠り、適宜日本語訳を試みる。(訳出に当たっては、主として、新潮文庫『狭き門』(山内義雄訳。昭和二十九年)を参照した)

第一に島津氏は「アリサが妹のジュリエットをジェロームに譲らうとする。」と述べ、それは「大君が妹を譲る動機にも、必ずしも同一でないものがあるけれども、……相當に類似してゐるところが、少なくともいのに驚かないわにはゆかない。殆ど同じやうな言葉さへ見出される場合すらある。」(69-70頁)と続けているが、第V章の初めのほうの、

J'appris aussi que Juliette, depuis mon départ, avait gardé devant sa soeur un obstiné silence que rien n'avait pu vaincre.

(91頁4-6丁目)

私はまた、ジュリエットが、私の出発以来、彼女の姉に対して、何物も打ち砕くことができない頑固な沈黙を守っているということも知った。

には、姉の偽善に対抗する妹の怒りが表れている。Jeromeより二歳年上のAlissaが彼を妹のJulietteジュリエットに譲った第IV章はAlissa

礼讃の基本方針が破られた唯一の箇所と言つてよい。

第二に、島津氏の文章の

結婚はしたくない。その代りにこのまゝで二人はいつまでも幸福でありたい。結婚をしないで、親しみのある友情を以て、兄妹以上の間柄であたい。ではおまへは結婚の幸福以上に何を求めるか。アリサの答は「聖らかさ」であつた。

という一段落ははなはだ不正確である。

— Que peut préférer l'âme au bonheur ? — m'écriai-je impétueusement. Elle murmura.

「La sainteté...」 si bas que, ce mot, je le devinai plutôt que je ne pus l'entendre.

(128頁3～6行目)

Alissaの「sainteté聖らかさ」という答えはあまり小さな声なので、聞き取れなかつた。そこでJerômeは、そう言つたと「察した(devinai)」のであつた。

「聖らかなまま死にたい」という女性の願望は決して断固たるものではなく男性の側にある程度そのような「精神性」を受け入れる素地があつたからこそ実現してしまつたのだという関係は、大君と薫にも当てはまるだろう。

確かに、Alissaは性的な不道徳を極端に嫌悪する、聖らかな女性であつた。だが、その聖らかさだけが、自ら食を絶つという緩慢な自殺を選ばせたのだろうか。だとすれば、なぜ彼女は心が満たされず、「Je suis seule 私は孤独だ」(178頁)が最後の一言になつたのか。

第Ⅵ章には二十五歳のAlissaが約二年ぶりにJerômeと再会する九月の出来事、第Ⅶ章には、翌年の復活祭の休暇、つまり来月には二十六歳になってしまうという四月の出来事が描かれて居り、この二つの章が作品全体を通して一番のクライマックスと言えよう。第Ⅶ章冒頭、花の中の再会の場面から、JerômeがAlissaへ語りかける場面を引用したい。

« Je voudrais tant, repris-je, que ces quelques jours près de toi nous paraissent pareils à d'autres jours..... Je veux dire: ne pas sentir, tous deux, qu'ils sont exceptionnels. Et puis... si nous pouvions ne pas trop chercher à causer d'abord... »

Elle se mit à rire.

(126頁14～19行目)

Jerômeの詞の最後の一文は新潮文庫(山内義雄訳)では

それに……初めのうち、つとめて話をしようなんてしないことにしたら……

(143頁16～17行目)

と訳されている。以下、他の邦訳も併記して置きたい。

①昭和六年 山内義雄訳

それに初めのうち、餘りわざわざ話をしようなんてつとめないことにしようぢやないか……

(白水社『狭き門』。CCVⅢ編)

②昭和十二年 川口篤訳

それに、初めは強ひて話さうと努めなくつても……

(岩波文庫。157頁)

③昭和三十年 新庄嘉章訳

それに……はじめは無理に話そうなんて努めないことにしたら……

(河出新書。125頁)

④昭和四十年 白井健三郎訳

それに……はじめのうちは、話し合おうとあまりしないようにすることができれば、いいんだがね……

(社会思想社現代教養文庫『狭き門・田園交響楽』。128頁)

⑤昭和四十三年再稿(昭和十二年初稿) 竹内道之助訳

それから……はじめのうちは、無理をしてあんまり話をしようとしないうことさ……

(成瀬書房。昭和五十一年発行)

⑥昭和四十五年 村上菊一郎訳

それに……最初は、あんまり話そうと努めないことにしたらいいんだが、……

(旺文社文庫。143頁)

⑦昭和四十六年 中村真一郎訳

「『僕はとても望んでいるんだ』に続けて」

それに……はじめのうちは、できるならあんまり無理に話そうとしないということ……

(講談社文庫。132頁)

⑧昭和四十八年 若林真訳

それから、……はじめのうちは、無理して喋ろうとしないでいらればね……

(集英社世界文学全集26。68頁上段)

⑨昭和五十二年 淀野隆三訳

それから……、はじめのうち、強いて話をしようなんてしないことにしよう……

(筑摩書房『カルメン 椿姫 狭き門 肉体の悪魔』。336頁上段)

だが、肝心なのは、このセンテンス全体が条件法に置かれていることである。フランス語の条件法は英語の仮定法、即ち、

If I were a bird, I would fly to you.

もしも僕が鳥だったら、君の所まで飛んで行くのに。

のような文に相当する法である。が、右の一文を例にすれば、仮定節 (If-clause) でわざわざ「鳥」になる以上「君の所まで飛んで行く」のは言わなくてもわかるはずであり、実際には、省略も多いのではなからうか。日本語の反実仮想も、仮定節 (「……ましかば」) と主節 (「……まし」) のうちのどちらかが省略される場合の方が両方揃う場合よりも多い。当該の条件法の一文中も、「Si (淋しいIf-clause) 淋しい」に導かれる仮定節のみが口に出され、主節は省略されているのであり、我々は省略された内容——「(もしそうなら) いいのに」「(もしそうなら) 僕は嬉しいのに」——を補って考えるべきである。その意味で最も明瞭な訳は④や⑧であろう。Jerome の詞の第一文

Je voudrais tant que —

—ほしいと思ってるんだ。

も、第二文

Je veux dire —

—いたいと思ってるんだ。

も、願望を述べたものだが、第三文でも願望、但し実現不可能な願望が述べられているのであった。

第VI章に於ける再会は、後の回想の中で「notre pénible revoir 僕達のつらい再会」(162頁28～29行目)と呼ばれているが、二人つきりになると「La gene intolérable堪えがたい程気詰りな思ひ」(117頁17行目)をし、握り合った手に汗をかきながら必死に言葉を探していた。

つまり、二人にとって、「ne pas trop chercher à causer 無理に喋ろうとしないでいること」は実現不可能な願望であった。女主人公もそのことに気付いて居り、Jeromeのこの詞を聞いて「se mit à rireへすと笑った」が、どれほどつらいに笑いであったろう。自分の最も良き理解者であるはずの男主人公は妹とはスムーズに会話ができるのに、自分と直接会う時には言葉を探さなければならぬと気付いたとき、女主人公の衝撃はどれほど大きかったろう。このあと、わざとみすばらしいかつこうをしたり、ピアノを弾かなくなったり、男の好むパスカルの著書を捨てたり、ついには男の目の前から姿を消したりするのも仕方の無い話である。

この世の幸福の不完全性に抗議し、永遠に愛されたいという観念は確かに女主人公の中で強固に形成されて行つた。だが、生身の人間は、普通、抽象的な観念や信仰心だけでは死ねはしない。不幸な結末の最初のきっかけは、やはり、目の前の男との会話の不毛、気持のすれ違い、堪えがたいほどの気詰りなどなど、具体的な事実の積み重ねにあった。

△注▽

- (1) 『源氏物語』の引用は、小学館新編日本古典文学全集本（新全集と略すことがある）に拠り、適宜、傍記や（ ）に内に注を施す。頁数行数や段落番号も同本に拠る。
- (2) 『紫式部集』巻末歌「題知らず 世の中をなに嘆かまし山桜花見る程の心なりせば」（岩波新日本古典文学系本に拠る。364頁）に拠れば、現実世界の嘆きを忘れる程「山桜」に魅せられてしまふ紫式部の感性が窺える。
- (3) 類例「世のこととして、つひの別れをのがれぬわざなめれど、思ひ慰まん方ありてこそ、悲しさをもさますものなめれ。」
- (4) 八の宮の姫君達への遺言。「椎本」。第五卷一八四頁。この例は婉曲・仮定の助動詞「む」を伴っている。
- (5) 『源氏物語の読みに関する一二の問題』。『源氏物語の探求』第十輯所収、昭和六十年
- (6) 『源氏物語論』。笠間書院、昭和四十七年
- (7) 中川氏は、八宮の薫への詞「さすがに行く末遠き人は、落ちあふれてさすらへむこと、これのみこそ、げに世を離れむ際のほだしなりけれ」（引用は、中川氏の引用本文である新潮日本

古典集成本に拠る。橋姫巻。第六卷二九三頁。傍線は中川氏に拠る。―傍線部の「人」を単数形と解釈している。この解釈に対する私見の詳細は後日申し述べたい。

八の宮が薫に託した娘が大君に特定できないことに気づかせたのは貴重だが、かと言って、中君に特定するのいいかがであらうか。

(8) 楽器の演奏の場面に就いて、西氏は次のように述べている。

薫が宇治の姉妹を始めて垣間見る場面で、姫君たちと楽器の取合せが、大君に琵琶・中の君に箏を習わせたという巻初めの設定と逆転しているとする理解は、

琵琶を前に置きて――コレハ、中君デアル。琵琶ヲ學ンデキル人ハ姫君デアルガ、今晚ハ得意藝ヲ取りカヘテ遊ンデ居ルノデアル。〔『源氏物語今かがみ』二〇八頁頭

注 新日本圓書 昭和二十一年八月〕

と述べられた吉澤義則博士以来、定まっているようである。

しかしながら、ではなぜこの場面で逆転した設定になっているのかについては、いまだ十分に意味づけられていない。「馴れた楽器までも取替へて、打解け遊ぶ乙女の思ひなげなる睦びを見ては、薫の心も動かざるを得なかつたであらうことを思はしめるものである。」(右掲書二二〇頁)という吉

澤博士説も、やや表面的である憾みが遺るように思う。

(51頁下段―52頁上段)

私は、薫の気持の読みに関して、吉沢氏の説が表面的だとは思わない。北山で光源氏が紫上に心を動かしたのも打ち解け遊ぶ彼女の思いなげなる様子を見たり聞いたりしたことだったからである。

だが、本人のそうした気持とは別に、薫の相手として中君を特定しようとした八宮の意図が、楽器の取り替えという偶然に拠って、空転したと読むことは可能であり、また、『宇津保物語』『住吉物語』や「紅梅」「竹河」に着目した第二節も極めて説得的であるので、新鮮な学恩を賜わった。

(9) 『中古文学』第六十号、平成九年十月

(10) 注(4)の藤村潔氏の著書48頁参照。

(11) 昭和十七年初版の『源氏随攷』に於いて、吉沢義則氏は次のように述べている。

私は國語國文の學に志して以来、解釋即ち訓詁の學が古學の基礎である事を説いて今日に及んでゐるのであるが、その業が質實である為に青年學徒の興味を引かず、とかくに哲學じみた花やかな談説の亂舞が展開するばかりで、いつ迄経つても國學が引締つて來ないのを遺憾と

する。今丁度着いた或雑誌に（以下、誤った本文解釈に基づく光源氏論が紹介される）筆を執つた時偶然見當つたから借用したままで、一寸した資料にも解釋は入念にしなければならぬ、解釋が誤つてゐたら、資料にはならぬといふ事が、言ひたかつたまでである。

右の誤ををかし人は相當の年齢に達したその道の念者である。私も停年を過ぎた老齡である。が、學びの道には果てもなければ底もない。下世話にも四十・五十は鼻垂れ小僧というやうだが、我々は六十になつてもなほ學界の鼻垂れ小僧であるに過ぎない。堂々たる大家の論文中にも、材料の解釋には、どうかと傾かれる例も少なくはないやうに思ふ。未見の書をペラ／＼とはぐる事によつて見つけたものに、自分の勝手な解釋を加へて資料となり、自分の豫備した組織中に折り込んでいくといったやうな、便宜的な學風を一掃したい。春の芽が砂礫の底から割り出してくるやうに、國語の本當の解釋の上に根をはつて、内から擡頭するのなければ、本當の日本學は成長しない。

（203頁。カッコ内は引用者）

右の著書は『源氏物語研究叢書』第9巻（クレス出版、平成九年）にも収められている。

（12） 片桐洋一氏『伊勢物語の研究（研究篇）』（明治書院、昭和四十三年）211頁参照。

（13） 吉沢義則氏の注（11）の著書でも、作中人物の意図を読み取る際、「單なる常識」よりも作品自体の言葉を重視するよう説かれてゐる。27頁12行目、28頁7行目。

また、吉沢氏『源語釈泉』（『源氏物語研究叢書』第10巻に再録）は、帰納的語義認定の方法を示した著書である。

（14） 中井賢一氏「薰像変容過程の客観的的定位——薰に対する無敬語表現をめぐって——」。『王朝文学研究誌』（大阪教育大学）第4号所収、平成六年3月

（15） 昭和五十七年二月 別冊国文学 源氏物語必携Ⅱ

平成三年 『源氏物語講座』（勉誠社）第二巻 物語を織りなす人々

平成五年 『源氏物語作中人物論集』（勉誠社） 森一郎氏編

平成十年五月 別冊国文学 人物造型からみた『源氏物語』鈴木日出男氏編

（16） 「思ひこそやれ」で結ばれる和歌は弔問が二例——桐壺卷（29頁）と葵卷（51頁）——、弔問以外の例一例——玉鬘卷（139頁）——で合計三首あるが、すべて、受け手を怒らせるよ

うなぞんざいな詠みぶりである。

(17) 『AERA MOOK アエラ ムック 「源氏物語」がわかる』

(平成九年七月)で次のように述べて居られる。

ドストエフスキーに『白痴』という小説があります。ムイシュキンとラゴージン(IIロゴージン)という二人の男性がヒーローで、アグラヤとナターシャ(IIナスターシャ)という二人の女性がヒロインです。ムイシュキンは天上的で精神的な性格、ラゴージンは地上的で肉欲的な性格として設定されています。

四人の人物がからまり合いながら筋が展開していくのですが、ナターシャはラゴージンによって殺され、アグラヤも結局幸福にはなれませんでした。二人の女性の不幸の原因はラゴージンよりもむしろムイシュキンにあるのではないか、ムイシュキンの天上性に惹かれたことがそれぞれの女性の不幸を招いたのではないか、というのが、正しいか正しくないかはわかりませんが、はじめてこの小説を読んだときの私の感想です。

源氏物語の第三部の主人公、薫と匂宮も、前者は精神的な人物、後者は肉欲的な人物として設定されています。(略) (「……」という)薫という人物を象徴する言葉に

接したとき、私ははっとムイシュキンを連想したのです。三人の姫君の三者三様の不幸の原因は薫の「精神」性にあるのではないかと。(24頁。カッコ内は引用者)

(18) 「きみはちゃんと知ってるはずだね。私は前にも一度言ったことだが、あの女を、△恋で愛しているのじゃなくて、あわれみで愛している▽んだからね。」(新潮文庫『白痴』。木村浩訳。上巻386頁。ムイシュキン公爵のロゴージンへの詞)「まあ、いちばん確かなことは、あんたの△あわれみ▽のほうがおれの恋より強いってことだね！」(同396頁。ロゴージンの公爵への詞)

(19) 中野幸一氏は「『源氏物語』の作中人物像」のなかで次のように述べている。

「おほつかない誰に問はましかにしてみても知らぬわが身ぞ。」これは薫がわが身の出生の懷疑を抱き、独り悩んで口ずさんだ歌である。薫という人物は、まさにこの歌を基底としていると言つてよい。表面は光源氏の嫡子として何不届ない栄華の境遇ではあったが、その実、柏木衛門督と女三の宮の罪の子としてこの世に生をうけた彼は、宿命的に暗く底知らぬ懷疑をみずからの身体に感じていた。「事にふれてわが身につつがある心地する」という

薫の生に対する漠とした不安が、何事につけても一步手前

で躊躇してしまう消極性を醸成している。(略)宇治の世

界における彼の求愛に、もう一步の迫力が欠けているのは、

絶えず出生の暗い不安につきまとわれている男の支柱を失っ

た精神が、愛の行動的な決断を躊躇させ逡巡させているか

らにほかならない。〔『物語文学論攷』。教育出版センター、

昭和四十六年〕

宇治十帖前半の薫を論ずる上で最も貴重な提言であろう。更に

大君を論ずる上で重要だと思ふのは、彼女が右のような事情を

全く知らなかったことである。戸籍上の姉である玉鬘でさえ、

薫を目の前にして「光源氏と顔が似ていない」と見て取ったに

もかわらず、血統の乱れを察知しなかったのだから、まして

大君は、出生への懷疑を基底とした将来への不安など想像すら

できなかったはずである。従つて、「彼の求愛に、もう一步の

迫力が欠けている」原因も、「行動的な決断を躊躇させ逡巡さ

せている」のも、自分への愛の薄さだと無意識のうちに判断し

ていたのではなからうか。

(20) 引用は『源氏物語研究叢書第1巻』(クレス出版、平成九年)に拠る。

(21) 『国語と国文学』第三十六巻4号(昭和三十四年4月)所収

〔付 記〕

本稿第2節第5節は、平成五年度全国大学国語国文学会春季大会

(於明海大学) 口頭発表「椎本巻の和歌」に大幅な加筆修正を施し

たものである。席上、上原作和氏、瀬戸宏太氏に、大会終了後、上

原氏に種々の御教示を賜わった。記して心から謝意を表します。